

平成 30 年度第2回古賀市スポーツ推進審議会【成人部会】 会議録
(要約筆記)

(座長)

- ・ただ今から平成30年度第2回古賀市スポーツ推進審議会成人部会を始める。成人部会座長の原因です。どうぞよろしくお願いたします。
- ・自己紹介も兼ねて各委員の現在の取組について共有したい。
- ・国や県の取組は市町村の取組が集まっての取組である。
- ・それぞれのみなさんの意見を共有し、そこからテーマへとつなげていければと思う。

(事務局)

- ・古賀市の現状としてスポーツ団体は多いが、新規にスポーツを始める環境としては既存団体で飽和状態にある。利用団体による利用時間の改善や指導者の育成のアプローチが課題であると捉えている。

(委員)

- ・障がい者スポーツ分野ではパラアスリートのコーチ（車いすバドミントン、ブラインドテニス）として、春日のクローバープラザで活動している。
- ・専門的な活動としては中途の聴覚障がい者向けに PC 等を使った要約筆記を行っている。

(委員)

- ・運動歴はダイエットをきっかけにジョギングを始め、今では子どもと一緒に走ったりしている。
- ・女性の場合、「美容」へのアプローチとして運動のきっかけや継続につながる感じる。
- ・スマートウォッチでアプリを使って歩数や走った距離、スピードも確認できる。便利なツールを活用してモチベーション維持につながる。
- ・世代によって運動の仕方は違う。今の時代はそれぞれのツールやコンテンツを活用して運動できる環境がある。
- ・健康意識を高く持っている企業も多く、健康をツールとした CSR 活動にも着手している。
- ・成人の場合はチームやグループになると（仲間がいると）継続へ結びつく可能性がある

(事務局)

- ・障がい者スポーツ指導員や総合型クラブのマネージャー資格を取得したが、活用する場を作ることが課題であると捉えている。

(座長)

- ・成人分野には大きな4つのテーマが与えられている。
- ・めざす姿から逆算して、どのようなアプローチをしていくのかが重要である。
- ・親子に着目すると、子どもがスポーツをすることで、自然と親も一緒にやっているような状況になることもある。例えば、応援で一日中立っていたり、歩き回ったりなど。特に若い時に体を動かしていた人はこのようなことを楽しむ傾向にある。当然、父親・母親、仕事をしている・していないでもアプローチの方法は異なる。

(委員)

- ・障がい者スポーツでも障がい種別、年齢やニーズでも異なる。

(事務局)

- ・する方も支える方も潤沢な状況ではない。受皿となるチームも少なく、指導者も多いわけではない。

(委員)

- ・障がい者スポーツは審判や指導者がいることが前提でのスポーツ活動である。

(座長)

- ・いわゆる健常者のスポーツは各地区に体育協会があり、ほぼすべての競技団体がある。
- ・障がい者スポーツについては、場を整える人、活動場所の確保が十分でない。
- ・市町村レベルで障がい者スポーツ協会があるところはほとんどない。

(委員)

- ・身体障がい者福祉協会が担っているところが多く、お世話している人はボランティアとして活動している。

・ボランティアについても活動しやすい組織づくりなどが必要である。

(座長)

・スポーツ実施と同様、障がい者スポーツ指導者資格を取る人は増えてきている、日常的な活動に関わるのは「時間がない」「活動場所がない」など難しいのが現状である。

(事務局)

・春日のクローバープラザか福岡市の障がい者スポーツセンター等、活動する場所は限られている。

(座長)

・スポーツのユニバーサルデザインを考えるべき。工夫をすればクラブチームと一緒に楽しく活動ができるかもしれない。

(委員)

・障がいについての理解や知識が前提となってくると思う。

(委員)

・障がい者の健康づくりについては、特段区別しているわけではない。
・健診の数値やデータはスポーツと直結する。危機感はきっかけにつながると思う。

(座長)

・健康診断で体重や BMI、血圧が前回と比較して上がった時、まずは運動へつながることが多いように感じる。やらなければいけないきっかけになる。

(委員)

・数値の改善が図られると嬉しくなり、運動の定着化にもつながっていく。
・障がいのある子にはぼっちゃりしている子どもが多い傾向にあり、体重のコントロールが難しい状況もあると思う。そこから生活習慣病につながることもある。
・就学前健診において、市の幼児は、全国や県と比較して肥満傾向児の割合が高い。
・日頃運動をする子どもとゲーム等をして過ごしている子どもでも全く異なる。

(座長)

・親が過去にスポーツをしていたら子どもにもさせる傾向にある。逆に親が全くスポーツに触れていなければ、子どもにもさせないというケースもある。これは、健常者も障がい者も同じである。

(委員)

・10年後古賀の年齢の比率はどうなっているか。
・手術に耐えられない人が入院してくるケースも多くなると思う。

(委員)

・団塊ジュニア世代が高齢者になる 2040 年を健康で迎えられるかが課題である。この 2040 年を健康な状態で迎えるため、今やらなければならないことがある。

(委員)

・運動習慣が定着化していけば、健康にも結びつく。
・簡単な運動をしながら、計算をするなど認知症予防や改善にもつながる。

(委員)

・情報を得ること、提供することは大事と思う。

(委員)

・バドミントンの練習でもラリー中にコートの様々な場所で数字を示し、選手はそれを計算しながら、ラリーを続けるという練習がある。視野を広げる、頭を使う、体を動かすことを同時に行う。

(座長)

・地域の公民館のレクリエーションではダーツを 3 本投げて、合計点を速く計算することができれば加点され

るなど、脳トレを兼ねたレクリエーションも行われている。

(委員)

- ・スポーツを使って何かをすることといった視点は大事である。

(座長)

- ・スポーツ業界で最近よく使われているのが「スポーツ×○○＝□□□」
- ・スポーツと何かを掛け合わせて、目標を達成するといった意味である。

(委員)

- ・スマートウォッチは障がい者スポーツでも活用しており、心拍数を計測したりしている。

(座長)

- ・先日イオンモール福津で、健康体力チェックやヨガ教室等のイベントを実施した。普段なかなかスポーツに触れることのできない人に対し、買い物途中で寄ってもらうような取組として実施をしている。
- ・これまで体育館や競技場で行っていたものは興味のある人しか来ない。
- ・体力テストに興味はあるが、正式な器具を使ってまでは抵抗がある人も多く、今回実施したのは、遊びながら体力チェックができるものであり、好評であった。

(委員)

- ・古賀のサンリブで実施したら集まると思う。

(委員)

- ・買い物ついでの主婦には響くと思う。
- ・サンリブ内に女性専用のジムはよく人が集まっている。

(座長)

- ・体力チェックと民間ジムのキャンペーンなどを絡めると定着化へ結びつくと感じる。
- ・民間の力を活用することは大事であり、行政はきっかけづくりを行っていく必要がある。
- ・運動が予防につながるという情報が得られるスペースを提供していくことが重要。
- ・イオンモールにはウォーキングコースが設定されており、所々でポイントがもらえたりする仕組みもある。

(委員)

- ・古賀市でも外出促進事業をやっていたと思う。以前は商品が必ずもらえていた。

(座長)

- ・運動のインセンティブとしてポイント制などは有効である。
- ・成人の協議を行うにあたり、「あったらいいな」ということを話していった方が効果的な取組につながると思う。
- ・今日話し合ったことを年代等で分けることでアプローチの手段が見えてくると思う。
- ・親子というワードがでたため、子どもの取組とも連携してくると思う。

(座長)

- ・以上で、第2回古賀市スポーツ推進審議会成人部会の審議を終了する。ご協力ありがとうございました。